



二〇二三年 聖徳太子一四〇〇年御聖忌記念



新縁起

第37回 室戸台風の猛威

昭和9(1934)年、京阪神地方を襲った室戸台風は、四天王寺にも甚大な被害をもたらしました。

9月21日。その日は彼岸で、縁日のため朝早くから多くの人々が境内を訪れていました。最初は小雨程度であった天候も午前7時頃から風が急激に強まります。参詣をあきらめて多くの人が帰路につくなか、中門や五重塔の周辺には避難する人々が集まってきました。当時五重塔には、中島・平野ら4名の番人がおり、おびえる人々に「この塔は未だかつて倒れた例はないのであるから大丈夫です」と声をかけて回ったといひます。

逃げ遅れた人がいないか確認するため、五重塔内の上層に登った中島は、尋常ではない塔の揺れに恐怖を覚えます。やっとのことで地上に降りた中島は、塔下に集まった人々に危険を知らせ、「命が惜しいならここを早く逃げてください。塔の上層はすでに危なくなっております」と呼びかけます。これを聞いた人々は金堂の方へ一目散に逃げだしますが、まだ十数人はじっとその場から動こうとしません。中には「この塔は決して倒れぬ。もし倒れるようなことがあったならば、大阪はおそらく全滅するであろうから、そんなことはあるまい」と言い張る者もいました。

中島は再び塔内に入り、基壇にしがみつきながら、平野とともに四天王立像や唐戸が倒れないように支えていました。その目の前では、金堂前にあった大きな賽銭箱が、金具の摩擦で火を噴きながら、西の回廊まで飛ばされていきました。午前8時頃、轟音とともに一瞬にしてあたりが粉塵で真っ暗になりました。中門が五重塔に向かって倒壊したのです。強風を直接受けるようになった五重塔は、揺れをさらに大きくしていきま



前・四天王寺 勸学部文化財係主任・学芸員 一本崇之

す。いよいよ身の危険を感じた平野は、意を決し塔外に出ますが、強風によって北東の用明殿近くまで吹き飛ばされてしまいました。強風にさらされた塔は南北に大きく揺れ、次第に塔全体が傾斜しはじめます。そして中央部が折れ曲がったと思つた瞬間、そこがぼらばらになり、塔は上層部から北側へ倒れていきました。その時、塔内には13人の参詣者と番人がとどまっていた。

1週間に及ぶ必死の捜索活動が行われましたが、膨大な瓦礫を撤去しながらの作業は困難を極め、中島と2名の参詣者が救出されたほかは皆助かりませんでした。中門倒壊による被害者と合わせて死者は15名にのぼっています。この台風で、中門・五重塔が完全に倒壊し、金堂も大きく破損しました【写真】。倒壊後の五重塔の調査では、心柱をはじめ側柱(がわばしら)や四天柱の一部が朽損していたことが判明しています。また、展望台として上層を開放していた関係で、枯木(はねぎ)の一部が取り除かれていたという証言もあり、これらによって構造的な負担があったことも倒壊の一因となったようです。



倒壊した中門と五重塔

2022年7・8月号
号外 7
2022

発行：NPO 法人 まち・すまいづくり
発行人：竹村伍郎
TEL&FAX：06-6779-7222
http://www.machi-sumai.com/
uemachi@machi-sumai.com
〒543-0043
大阪市天王寺区勝山1-11-29

らくご ハローワーク



相羽秋夫の

第7職 『芝浜』で拾った財布 夢と消え

皆さんは、一心太助(いっしんたすけ)という人物をご記憶だろうか。歌舞伎や講談でおなじみの、気風(きっぷ)が良く、義侠心に富んだ男だ。「天下のご意見番」といわれた大久保彦左衛門にも可愛いがられた。この太助、本業は魚売りである。

冷凍や冷蔵の技術がない時代は、魚介類の販売は鮮度だけが勝負になる。上方では「手噛む鯛(ててかむいわし)」、つまり手に噛みつく位の生きのよい鯛だ、と売り声をあげて町々を回った。だから売り手も意気の良さが要求される。そんな気性の魚売りの男を描いた名作人情噺『芝浜』の粗筋(あらすじ)は、こうである。

腕は良いが酒ばかり呑んで怠けている魚売りがいる。見かねた女房が、早朝にたたき起こして、魚河岸に仕入れに行かせる。早過ぎたので、



市はまだ開いていない。仕方なく男は、海辺で顔を洗おうとすると、財布が流れついていく。中を見るとたっぷり50両はある。思わず懐に入れ家に帰る。妻に子細を話し、友人を招いて祝いの宴を開く。泥酔して寝た翌朝、女房から「あれは、あなたの見た夢だ。50両などなく、この通り借金だけ残っている」と告げられ、男は反省し、人が変わったように働く。いつしか店を構え、奉公人を置く程、繁盛するようになる。

3年経った大晦日の夜、店終いし夫婦2人だけになった時、女房は50両を前に置き、「これはあの時の金だ。あのままではあなたが盗人になってしまふので、お上(かみ)に届け出たものが還ってきた」と真相を明かす。感謝した男に、女房が「一杯どうぞ」と酒を勧めると、男「やめとく、また夢になる」。

江戸期の魚河岸は、江戸では日本橋と深川に、大坂では今の西区(うづぼ)にあり、上方では「雑喉場(ざごば)」と言った。天満の青物市場と双壁をなした。「雑喉場の時化(しけ)で鯛(台)無し」のしゃれ言葉が残っている。落語家の桂ざこばは、ここから来た名前だ。こんなことも、酒のサカナになりませんか。

NPO法人「まち・すまいづくり」活動報告

各種予約・お問い合わせはNPO法人「まち・すまいづくり」まで
TEL:06-6779-7222

住まいと暮らしの無料相談会

7月9日(土) 10時~12時

大事なことなのだけど、なかなか日常生活では相談できない住まいと暮らしの「困った!」はありませんか? 「住まいと暮らしの無料相談会」は弁護士、司法書士、一級建築士、税理士、宅地建物取引士などの当法人会員が専門知識を生かしてご相談に応じます。電話もしくはHPよりお申し込みください。

「うえまち」出版物 歴博で販売中

まち・すまいづくり編集・出版の刊行物(左記)が、大阪歴史博物館「ミュージアムショップ」で好評販売中です。

- 上町台地名所百景
- うえまち 上町台地を想い観る
- うえまち第二集 上町台地と大坂夏の陣
- 夕陽丘まち談義 「都市デザイン」の資源発掘
- うえまち「大坂の陣」特選集 大坂の陣のとき 一心寺は

うえまち寄席

8月13日(土) 14時開演

桂佐ん吉、桂ちよぶによる、上方落語発祥の地・上町台地にふさわしい、古典を中心とした落語会です。電話または電子チケット販売サイト「TIGET(チケット)」からも予約可能です。

場 所：一心寺南会所(天王寺区逢坂2-7)
入場料：2000円



二〇二三年 聖徳太子一四〇〇年御聖忌記念

四天王寺 新縁起

第38回 五重塔の再建



前・四天王寺 勸学部文化財係主任・学芸員 一本崇之

2022年7・8月号

号外 2022 8

発行：NPO 法人 まち・すまいづくり 発行人：竹村伍郎 TEL&FAX：06-6779-7222 http://www.machi-sumai.com/ uemachi@machi-sumai.com 〒543-0043 大阪市天王寺区勝山1-11-29

7)年4月12日、各地より集められた五重塔用材の巨木が湊町駅(現在のJR難波駅)に集結し、そこから四天王寺まで木曳式が盛大に挙行されました。その行列の華やかなさまに涙する市民もいたといえます。翌年5月には3つの巨木を接いで、総長137尺(41メートル)もの心柱が完成し、5月22日に五重塔初層立柱式並びに舍利塔納入式が行われています。

室戸台風によって倒壊した五重塔の瓦礫を前に、人々は呆然と立ち尽くすしかありませんでした。しかしすぐに一山の総力をあげて五重塔を再建すべく動き出します。

昭和9(1934)年11月、五重塔再建に伴う基礎の発掘作業が、京都帝国大学教授であった建築史家・天沼俊一氏を中心に行われました。その結果、文化再建の塔心礎に埋納された舍利容器が四方を銅板で囲う形で発見され、塔心礎の下からは木造薬師如来像や素焼きの釈迦如来千体仏が見つかっています。さらに、倒壊した塔心礎の3・6メートル真下からは創建期(飛鳥時代)の塔心礎であると考えられる大盤石が発見され、塔や中門の基礎周辺では飛鳥時代、奈良時代の瓦が多数出土しました。

昭和9(1934)年11月、五重塔再建に伴う基礎の発掘作業が、京都帝国大学教授であった建築史家・天沼俊一氏を中心に行われました。その結果、文化再建の塔心礎に埋納された舍利容器が四方を銅板で囲う形で発見され、塔心礎の下からは木造薬師如来像や素焼きの釈迦如来千体仏が見つかっています。さらに、倒壊した塔心礎の3・6メートル真下からは創建期(飛鳥時代)の塔心礎であると考えられる大盤石が発見され、塔や中門の基礎周辺では飛鳥時代、奈良時代の瓦が多数出土しました。

昭和9(1934)年11月、五重塔再建に伴う基礎の発掘作業が、京都帝国大学教授であった建築史家・天沼俊一氏を中心に行われました。その結果、文化再建の塔心礎に埋納された舍利容器が四方を銅板で囲う形で発見され、塔心礎の下からは木造薬師如来像や素焼きの釈迦如来千体仏が見つかっています。さらに、倒壊した塔心礎の3・6メートル真下からは創建期(飛鳥時代)の塔心礎であると考えられる大盤石が発見され、塔や中門の基礎周辺では飛鳥時代、奈良時代の瓦が多数出土しました。

昭和9(1934)年11月、五重塔再建に伴う基礎の発掘作業が、京都帝国大学教授であった建築史家・天沼俊一氏を中心に行われました。その結果、文化再建の塔心礎に埋納された舍利容器が四方を銅板で囲う形で発見され、塔心礎の下からは木造薬師如来像や素焼きの釈迦如来千体仏が見つかっています。さらに、倒壊した塔心礎の3・6メートル真下からは創建期(飛鳥時代)の塔心礎であると考えられる大盤石が発見され、塔や中門の基礎周辺では飛鳥時代、奈良時代の瓦が多数出土しました。

昭和9(1934)年11月、五重塔再建に伴う基礎の発掘作業が、京都帝国大学教授であった建築史家・天沼俊一氏を中心に行われました。その結果、文化再建の塔心礎に埋納された舍利容器が四方を銅板で囲う形で発見され、塔心礎の下からは木造薬師如来像や素焼きの釈迦如来千体仏が見つかっています。さらに、倒壊した塔心礎の3・6メートル真下からは創建期(飛鳥時代)の塔心礎であると考えられる大盤石が発見され、塔や中門の基礎周辺では飛鳥時代、奈良時代の瓦が多数出土しました。

昭和9(1934)年11月、五重塔再建に伴う基礎の発掘作業が、京都帝国大学教授であった建築史家・天沼俊一氏を中心に行われました。その結果、文化再建の塔心礎に埋納された舍利容器が四方を銅板で囲う形で発見され、塔心礎の下からは木造薬師如来像や素焼きの釈迦如来千体仏が見つかっています。さらに、倒壊した塔心礎の3・6メートル真下からは創建期(飛鳥時代)の塔心礎であると考えられる大盤石が発見され、塔や中門の基礎周辺では飛鳥時代、奈良時代の瓦が多数出土しました。

昭和9(1934)年11月、五重塔再建に伴う基礎の発掘作業が、京都帝国大学教授であった建築史家・天沼俊一氏を中心に行われました。その結果、文化再建の塔心礎に埋納された舍利容器が四方を銅板で囲う形で発見され、塔心礎の下からは木造薬師如来像や素焼きの釈迦如来千体仏が見つかっています。さらに、倒壊した塔心礎の3・6メートル真下からは創建期(飛鳥時代)の塔心礎であると考えられる大盤石が発見され、塔や中門の基礎周辺では飛鳥時代、奈良時代の瓦が多数出土しました。

昭和9(1934)年11月、五重塔再建に伴う基礎の発掘作業が、京都帝国大学教授であった建築史家・天沼俊一氏を中心に行われました。その結果、文化再建の塔心礎に埋納された舍利容器が四方を銅板で囲う形で発見され、塔心礎の下からは木造薬師如来像や素焼きの釈迦如来千体仏が見つかっています。さらに、倒壊した塔心礎の3・6メートル真下からは創建期(飛鳥時代)の塔心礎であると考えられる大盤石が発見され、塔や中門の基礎周辺では飛鳥時代、奈良時代の瓦が多数出土しました。

昭和9(1934)年11月、五重塔再建に伴う基礎の発掘作業が、京都帝国大学教授であった建築史家・天沼俊一氏を中心に行われました。その結果、文化再建の塔心礎に埋納された舍利容器が四方を銅板で囲う形で発見され、塔心礎の下からは木造薬師如来像や素焼きの釈迦如来千体仏が見つかっています。さらに、倒壊した塔心礎の3・6メートル真下からは創建期(飛鳥時代)の塔心礎であると考えられる大盤石が発見され、塔や中門の基礎周辺では飛鳥時代、奈良時代の瓦が多数出土しました。

昭和9(1934)年11月、五重塔再建に伴う基礎の発掘作業が、京都帝国大学教授であった建築史家・天沼俊一氏を中心に行われました。その結果、文化再建の塔心礎に埋納された舍利容器が四方を銅板で囲う形で発見され、塔心礎の下からは木造薬師如来像や素焼きの釈迦如来千体仏が見つかっています。さらに、倒壊した塔心礎の3・6メートル真下からは創建期(飛鳥時代)の塔心礎であると考えられる大盤石が発見され、塔や中門の基礎周辺では飛鳥時代、奈良時代の瓦が多数出土しました。

昭和9(1934)年11月、五重塔再建に伴う基礎の発掘作業が、京都帝国大学教授であった建築史家・天沼俊一氏を中心に行われました。その結果、文化再建の塔心礎に埋納された舍利容器が四方を銅板で囲う形で発見され、塔心礎の下からは木造薬師如来像や素焼きの釈迦如来千体仏が見つかっています。さらに、倒壊した塔心礎の3・6メートル真下からは創建期(飛鳥時代)の塔心礎であると考えられる大盤石が発見され、塔や中門の基礎周辺では飛鳥時代、奈良時代の瓦が多数出土しました。

昭和9(1934)年11月、五重塔再建に伴う基礎の発掘作業が、京都帝国大学教授であった建築史家・天沼俊一氏を中心に行われました。その結果、文化再建の塔心礎に埋納された舍利容器が四方を銅板で囲う形で発見され、塔心礎の下からは木造薬師如来像や素焼きの釈迦如来千体仏が見つかっています。さらに、倒壊した塔心礎の3・6メートル真下からは創建期(飛鳥時代)の塔心礎であると考えられる大盤石が発見され、塔や中門の基礎周辺では飛鳥時代、奈良時代の瓦が多数出土しました。

昭和9(1934)年11月、五重塔再建に伴う基礎の発掘作業が、京都帝国大学教授であった建築史家・天沼俊一氏を中心に行われました。その結果、文化再建の塔心礎に埋納された舍利容器が四方を銅板で囲う形で発見され、塔心礎の下からは木造薬師如来像や素焼きの釈迦如来千体仏が見つかっています。さらに、倒壊した塔心礎の3・6メートル真下からは創建期(飛鳥時代)の塔心礎であると考えられる大盤石が発見され、塔や中門の基礎周辺では飛鳥時代、奈良時代の瓦が多数出土しました。



昭和再建五重塔

らくご ハローワーク



相羽秋夫の

第8職 『お茶汲み』で遊女も客も騙し合い

通って欲しい」と言って泣きぐずれた。よく見ると、湯呑のお茶を目に塗って涙に見立てていた」と、遊女のしたたかさを明かす。それを聞いた男の一人が、その夜吉原に行く。くだんの遊女を呼び、部屋に入ってくるなり悲鳴をあげ、「おまえは、かけ落ちて死んだ女と瓜二つだ。年期があげたら女房になってくれ」と涙声で迫ると、女は立ち上がり「お茶を汲んで来てあげる」。

1957(昭和32)年に「売春防止法」が施行されるまで、遊女(花魁)おいらん・女郎・娼妓・傾城(けいせい)は公認の職業であった。と言って、も、江戸幕府を開設した徳川家康は、吉原のみを公認し、五街道の出発地の品川・新橋・板橋・千住の四宿(ししゅく)を準公認とした。他の岡場所(江戸で50か所)や夜鷹(よたか)は私娼で、取り締まりの対象にあつた。

この吉原が舞台の古典落語は多くあるが、その一つに『お茶汲み』がある。

若い男が集まって吉原の遊女を買いに行こうと話がまるとまる。中の一人が遊女のこんな話を披露する。「顔を眺めるなり悲鳴をあげ、おんたは、私とかけ落ちし、すぐ死んだ男にそっくりだ。私はあんなにその男と思いきくので、あんなにも見限らず



「当世美女五人揃」豊原国周

吉原の最盛期には、遊女3000人が所属していた。当然、階級があつた。下から、15歳までの客を取らない少女の禿(かむろ)。客の呼び込みや遊女と対面までの世話をする番頭新造。客を取る振袖新造。ここから花魁の敬称が付く部屋持ち。座敷持ち。さらには昼三。最高峰の店に数人しかいない呼出し昼三のヒエラルキーが確立していた。料金も、振袖新造の1万5000円ぐらいから、昼三の15万円まで、幅が広がった。特に呼出し昼三は、芸妓や翳間との遊興代や飲食代を合わせると、一晩で100万円を超したという。そうした高級遊女は、「初会」は会話のみ。2回目の「裏を返す」時は飲食が主体。3回目には初床入りとなる。そして遊郭では、接するのはこの遊女のみに限られた。つまり、疑似夫婦となり、他の遊女との浮気は許されなかった。性の遊びにも厳しい規律があつた。性は聖なり、である。

大人のための

文章教室

ライター・編集者 松本正行

接続詞を省いて 締まった文章に

彼は駅に向かった。そして、彼女も駅に向かった。だから、彼らは会うことができた。

映画のような場面を描いたつもりなのですが、どうも間延びした感じがします。理由は、この短い文章のなかに接続詞が2つもあるから(「そして」と「だから」)。試しに2つとも取ってみましょう。まったく違和感がありませんね。締まった感じがして、映画のワン・シーンのような情景が浮かびます。

彼は駅に向かった。彼女も駅に向かった。彼らは会うことができた。

接続詞は文と文をつなぐ働きをしています。読み手の理解が進む「方向指示器」のような役割もしています。「しかし」が出てきたら反対の意味の文につながる(逆接、など)。とはいっても、多くの接続詞はなくても意味は通じるのです。むしろ、接続詞が多過ぎると読みづらくなってしまう。「しかし」など逆説の接続詞は省略しない方がいい場合がほとんどですが、「そして」など順接の接続詞の多くはなくても大丈夫。接続詞は必要最小限に——覚えておきましょう。

※本連載は「うえまち号外」掲載分以外も、Webでご覧いただけます(「うえまち」で検索)。

上町台地上にある高津高校出身。新聞社・出版社勤務を経て、現在、Webや雑誌等で活躍中。NPO法人「まち・すまいづくり」会員。